

関連性理論に基づく語用論研究の可能性

— 談話連結の解釈プロセスを中心に —

中山 仁¹⁾

Some Observations on Discourse Linking: A Relevance-Theoretic Approach

Hitoshi NAKAYAMA¹⁾

I. はじめに

本稿では Sperber and Wilson (1986/95) によって提唱された発話解釈理論「関連性理論」を概観し、これまで見過ごされてきた言語事実や、特定の分析が当然視されてきた言語現象などについて、この理論が新たな視点から興味深い説明を与えることが可能であることを示し、語用論研究はもとより、意味論研究においても影響力のある、広範囲な射程を持つ理論であることを論じる。実際、関連性理論は伝達に関する一般理論であるので、その適用範囲は言語伝達に限らないが、ここでは言語伝達についてのみ扱うことにする。特にⅨ節では、具体的な適用例として、筆者がこれまで強い関心を抱いてきた談話連結に関するいくつかのパタンを取り上げ、関連性理論による分析の可能性について考察する。

II. 語用論の課題：2つの意味の特定

言語伝達に関する根本的な問題の一つに、「言語伝達はなぜ成立するのか」という問いがある。言い換えれば、人はいかにして相手の発話を理解することができるのか、また、発話理解のために必要とされる能力とはいかなるものか、という問題である。発話とその理解（解釈）において重要なポイントとなるのが話し手と聞き手の関係である。つまり、話し手はどのような意図を持って、どのような言語形式を用いて発話を行うのか、また、聞き手は発話に用いられた言語形式を頼りにどのようにして話し手の意図を汲み取るのか、という点について明ら

かにする必要がある。話し手の意図と言語形式に注目してみると、言語伝達には2つの意味が関わっているのが分かる。つまり発話された言葉の「文字通りの意味」と話し手の意図する「伝えたい意味」である。したがって、発話の意味を特定することは、この2つの意味の関係あるいは意味の「ずれ」を特定することにある。Sperber and Wilson (1986/95) は文の意味を介して発話の意味を理解するプロセスを解明することが語用論の課題の一つであると主張する。

ところで、「文字通りの意味」を介して「伝えたい意味」を伝えるとはどのようなことかを次の例で確認しておく。

- (1) a. Who do you think you're talking to?
- b. Take care.

(1a) は疑問文の形式をとっているが、疑問に答えること、すなわち who によって求められている人物を答えてもらうことを期待して発話されている訳ではない。なぜなら、その答えは当事者にとって自明だからである。この発話の主たる意図は発話の直前に行なわれた相手の口の利き方に対して非難を表明することにある。(1b) は「じゃあね」という別れ際の挨拶としてよく使われる表現であり、この場合、命令形は使われていても相手に対して命令を遂行しているわけではない。

また、統語形式だけでなく、(意味論的な) 意味内容と発話の意味の間にも大きなずれが生じる場合が多い。日本語で「善処いたします」と言えば「適切な処置をとる」という本来の意味以外に「さし当たっては何の処置もしない」という否定的な意味を表す場合もあり、本来の肯定的な意味と正反対になるし、「つまらないもので

1) 福島県立医科大学看護学部 総合科学部門

key words : pragmatics, relevance, discourse, discourse connectives

キーワード : 語用論, 関連性, 談話, 談話連結語

受付日 : 2005. 9. 5 受理日 : 2005. 10. 11

すが」と言って贈り物を渡す際、話し手が本当につまらないものと思っているなどということは通例ありえない。

このように、英語・日本語を問わず（言語を問わず）実際の発話において、文字通りの意味と伝えたい意味のずれは日常的に生じるものであり、特別な現象ではない。問題は、このずれを聞き手がいかにして発話場面において瞬時に理解することができるのかということである。(1)のような例を見る限りでは、文字通りの意味と伝えたい意味（話し手の意味）との間には比較的明確な規則のようなものが存在するようにも思われる。それならば、統語論・意味論における規則体系と同様な一定の規則の集合体が語用論にも存在すると考えてよいだろうか。

上記の2つの意味の間に一定の関係は存在するにしても、文字通りの意味（文の意味）を支配している文法規則のような、対応規則による記号の解釈（コードモデル）を語用論に当てはめるのは妥当ではない。例えば、(1a)のような疑問文が「非難」を含意するものとしてコード化されていると考えると、同時に類似した疑問文（例えば *Who do you think you're calling.* など）にも必ず適応させなくてはならないことになる。このことは文の形式に限ったことではなく、語のレベルでも同様である。例えば、*ditto* という語は「先に用いた語句を繰り返す」という意味でコード化されていると言えるかもしれない（少なくとも辞書的にはそのように定義される）。しかし、(2a)の *ditto* は *I love you.* を指し（ただし、この場合の *you* は「自分」のことではなく *I love you.* と自分に言った「相手」）、(2b)の *ditto* は "...are dead" に相当する部分を指している。同じ *ditto* でも発話の場面が異なれば意味も指示する内容も全く異なる。これは代名詞の場合も同じである。概念的意味を持つ *dog* や *cat* は「犬、猫」とコード化できるが、*ditto* などは逐一その指示対象の対応を記述することは不可能なのである。

(2) a. "I love you." "Ditto."

b. Lister's dead. *Ditto* three Miami drug dealers and a lady. (COBUILD2)

また、同じ発話であっても一定の対応規則を適用することは困難である。例えば、「コーヒー、どう?」と尋ねられた相手が以下のように返答したとする。

(3) ありがとう。

(3)の解釈は「コーヒーをいただきます」である可能性が高いが、この返答をしたからと言って話し手が実際にコーヒーを飲むとは限らない。(3)の発話をした後で「でも今日は遠慮しとくよ」という発話が続いたとしても(3)の発話が誤りとはならない（真理値に影響を与えない）。つまり、同じ文字通りの意味から可能性な何通

りかの話し手の意味が生まれるのである。このような例をコード解釈によって説明することはできない（そもそも「コーヒー、どう?」の解釈もあいまい (ambiguous) である)。

発話解釈の背景にあるのは文法規則のようなコード対応規則の集合体ではないことはこれで明らかである。それでも、上記で見たように、発話は少なくとも一定の約束が保たれた上で行われていると考えざるを得ない。つまり、発話は規則のような厳密なものではなく、何らかの原理、原則に従って行われると考えられる。語用論上の原則のいくつかを以下の例で見してみる。

(4) a. 明日ロンドンから電話します。

b. 話し手は明日ロンドンにいる

(5) a. Arthur married Marilyn.

b. Arthur は男性, Marilyn は女性 (少なくとも2人は異性同士)

(6) a. 「コーヒー、どう?」「ありがとう」

b. 「コーヒーをいただきます」

(4a)を発話した場合(4b)は聞き手によって必然的に導かれる内容である。このような論理的必然性は他の発話にも広く当てはまる。(5a)は文化的知識や常識によって(5b)が当然視される。(6)では、(6a)下線部によって聞き手は(6b)を推論によって導き出している例である。これらがコード対応規則と異なり原則と見なされるのは以下の理由からである((7a, b)は Grice (1967)の「推意」および「推意の取り消し可能性」、(7c)は Sperber and Wilson (1986/95)から)。

(7) a. 高い確率で起こることが予測できるが、起こらないこともある

b. 発言をキャンセルすることができる

c. 誤解を引き起こすことがある

このような特徴を持った語用論上の原則を説明することが発話解釈にとっては不可欠であり、関連性理論もこれに沿った形で展開されている。その詳細を見る前に文脈と推論について考えてみよう。

Ⅲ. 文脈と推論

発話解釈に一定の原則が働いていることは理解できたが、その原則が適用される対象についての議論がまだあいまいである。例えば、(4)-(6)では一見したところ(a)文から(b)文へと自動的に導かれているようであるが、(7)の理由から必ずしも唯一の帰結が導かれるわけではない(そのような考え方をするとコード主義と一致してしまう)。発話によって示された2つの意味の理解には話し手の意図を中心とする話し手と聞き手の関係が重要となることは既に述べた。さらに、文字通りの意味を伝

えたい意味に結びつけるためには、発話された文に加えて何らかの情報が必要となる。これが文脈であり、発話理解の決め手の一つとなる。

文脈は通例以下の3つのタイプに分けられる。

- (8) a. 言語的文脈
- b. 状況的文脈
- c. 百科事典的知識 (encyclopedic knowledge)

例えば、「それって本当？」という発話における「それ」は先行する発話内容を指しており、言語的文脈を頼りに「それ」の対象が特定される。状況的文脈とは、「君の名前は？」における「君」が発話の向けられた相手を指す場合や、非言語的事実（例えば人の行為）に対して「なるほど」と発話する場合など、発話の場において入手できる情報などを指す。百科事典的知識とは、自分の持っている限りの知識、経験、記憶を指す。そして、この文脈がどのようにして引き出されるかを決定するのが推論である。例えば、(9)の後半部について考える文脈と推論の関係を示すと概略(10)のようになる。

- (9) 「クラブ出る？」「今日バイトなんだ」
- (10) a. (今日) (テニスの) クラブに出るか (状況的文脈)
- b. 今日 (話し手は) バイトがある (状況的文脈)
- c. クラブの時間にバイトが入る学生もいる (百科事典的知識)
- d. バイトが入るとクラブには出られない (推論・百科事典的知識)
- e. (話し手は) クラブには出られない (推論)

したがって、発話解釈の解明とは「聞き手がどのような文脈に基づいて、どのような推論をして、話し手の発話を解釈するか」に対して解答を与えることであると考える。

IV. 言語伝達のタイプと語用論の射程

発話解釈理論について詳述する前に言語伝達のタイプと語用論が対象とすべき言語伝達について確認しておく必要がある。Wilson (2004-05a) は言語伝達を(11)のように分類する。

- (11) a. 偶発的な情報伝達
- b. 意図的な情報伝達
 - ①明示的な情報伝達
 - ②非明示的な情報伝達

(11 a) は話し手の訛りや癖など、話し手が意識して伝えるつもりのない情報が相手に伝わるような伝達である。また、(11 b ②) は話し手が聞き手を欺いたり情報量を調節したりする場合が当てはまる。Wilson は、語用論が取り組むべき対象を(11 b ①)に示す「意図明示

的な情報伝達」に限定する。言語伝達の主たる目的は、自分の意図を、相手に理解してもらいたいと思っただけである。そのためにはその意図が理解されやすいように明確な形で表されなければならない。たとえ話し手が嘘をついた場合でも、話し手は嘘を除いた部分について過不足なく理解してもらいたいと思っただけで発話を行っている。そうでなければ嘘も話し手の思ったとおりに成立しない危険性があるからである。これを前提に、以下ではここまでで明確になった語用論の課題をさらに具体化し、推論モデルの発話解釈理論である関連性理論について概観する。

V. 推論モデルの語用論

前述に従って語用論の課題 (Wilson 2004-05) をまとめると以下ようになる。

- (12) a. 話し手の用いた文字通りの意味は何か
 - b. その文字通りの意味によって伝えたかった意味は何か
 - c. 上記2つを理解するために必要な文脈は何か
- そして、伝達の成否を握る鍵が推論である。発話解釈に推論が関与していることを理解するためには、人間の意図的行動と推論能力の関係を把握する必要がある。

Grice (1967) を始めとする推論モデルの語用論では、「人間には、相手の行動の背景にある意図を推測する能力に長けている」と仮定する。言い換えれば、相手の行動は「意図を明らかにする (また、それに必要な推論を行うための) 証拠」と捉えることができるのである。

これに基づき、Grice は、発話は人間の意図的・理性的行動の一種であり、正しい推論を導くためのより明確な証拠と位置づける。したがって、聞き手がその推論をどのように導くかが推論モデルの語用論の課題となる。Grice は「会話は協同作業である」(協調の原理) という立場を取り、これに沿った具体的な行動規範 (4つの格率 (maxims)) を設定して分析を行う。詳細は省くが、Grice 流の分析の問題点としては、(1)協調の原理の根拠があいまいである、(2)格率に用いられる用語 (例えば「関連性」) の定義があいまいである、(3)複数の解釈を容認してしまう (単一の解釈にたどり着くための解釈プロセスが明確でない)、(4)解釈プロセスは必ずしも意識的ではない、ということが指摘されており、これまでいくつかの修正案が提出されてきた。

このうち、Grice 流の分析の批判的検討を通して提案されたのが関連性理論である。関連性理論の特徴は主に以下の4つである。

- (13) a. 推論モデルによる語用論理論の一つ
- b. 人間の認知システムとの関わりで話し手の意

味を解明する立場（認知論的アプローチ）

- c. 言語伝達はコミュニケーションの一形態にすぎない（意図明示的伝達，言語という刺激によって伝達意図を明示化している）とする立場
- d. 情報の受け手（＝聞き手）を重視

(13)において Grice と明らかに異なるのは，(13b, d) である。(13b) については以下の関連性理論における主要概念の説明の中で触れる。(13d) は Grice の分析の核となる協調の原理と対照される点で興味深い。Sperber and Wilson (1986/95) によれば，伝達は「協同作業」というよりは「聞き手への情報提供 (offer)」であると捉える。これは，話し手の意図がどうであれ，解釈の選択は最終的に聞き手にゆだねられるという考え方による。したがって，話し手は自分の意図を聞き手に理解してもらえぬ形で伝達を行おうとしているものと捉える（つまり，先に述べた意図明示的情報伝達に相当する）。伝達の際，時には聞き手に理解してもらえないこともあり，これが誤解を導くことになる。Grice と異なり，誤解も含めた発話解釈を説明することができる点で関連性理論はより説明力のある理論とすることができる。次に，関連性理論の主要概念と具体的な解釈プロセスについて見る。

VI. 関連性理論の概要

Sperber and Wilson (1986/95) は人間の認知能力に関する基本的な仮説として (14) をあげる。

- (14) 人間の認知能力は関連性を求めるように働いている

言い換えれば，知覚，記憶，推論を含む人間の認知体系は潜在的に自己にとって関連性のある情報を求めるように働いている，というものである。関連性 (relevance) は人間の情報処理における認知効果という観点から捉えられる。人間は，言葉に限らず，新たに入手した情報を既知の情報と結びつけて（無意識のうちに）(1) 既存の情報を強化したり，(2) 訂正したり，(3) 何らかの結論を導いたりすることができる。新情報が(1)から(3)のような結果をもたらした場合，その新情報は認知環境に改善をもたらしたことになる，認知効果があったことになる。この際，そのような新情報を「関連性のある」情報と言う。したがって，情報の強化も訂正もなく，何の結論も導かない情報は関連性のない情報と見なされる。発話における話し手と聞き手の関係を関連性の概念を用いれば，話し手には関連性のある情報があり，それを聞き手に分かるような形で伝えており，聞き手は，話し手が関連性のある情報を伝えているはずであるという前提で聞いていると言うことができる。

話し手の伝えたい意味の理解には文脈が必要であることは先に述べた。認知論的な発話解釈のアプローチでは文脈についてもより明確な捉え方をする。これまで，文脈とは漠然と「世界」や「前後すべての発話」を指していたが，関連性理論では文脈を「発話解釈の時点で実際に利用されている，心的に表示された想定 (assumptions) の集合」と定義する。この場合の想定とは「仮に思い抱く」ことを意味するのではなく，それまで抱いていた情報や知識，記憶などで，正しい認識，誤った認識も含む。聞き手に入力された新情報はこの文脈との相互作用によって，聞き手の想定を強化したり，削除したり，新たな想定を生み出すのに関わる。

では，その文脈はどのように選択されるのであろうか。関連性理論では，文脈とは，発話以前から既に固定して存在しているものではなく，発話解釈者である聞き手が発話時点で選択するものと捉える。そして，その選択の決め手になるのが関連性である。聞き手は関連性のある解釈に至るために必要な想定を選び出し（あるいは記憶の百科事典的知識にアクセスして）その場に最もふさわしい文脈を構成するのである。

VII. 関連性理論における発話解釈の手順

(14) で見たように，人間の認知能力は関連性を求めるように働いている。これに基づいて，関連性理論では以下の2つの関連性の原則を提案する。

- (15) 関連性の認知原理 (Cognitive Principle of Relevance)
人間の認知システムは関連性を最大化するように働く傾向がある。
- (16) 伝達一般に関わる関連性の原理 (Communicative Principle of Relevance)
発話（および他の）意図明示的の刺激は最適な関連性を見込みを生み出す。(Sperber and Wilson 1995)

(15) は「人間はより深く広い理解をより効率的な方法で行おうとするようにできている」と言い換えることができる。ここで言う「効率的な方法」に関して，関連性理論では「処理労力 (processing effort)」を考慮に入れる。したがって，処理労力が少なければ関連性は大きくなる。これは認知効果とともに関連性の度合いを決定する要因となる。最適な関連性の見込みとは以下のようなものである。

- (17) 最適な関連性の見込み (Presumption of Optimal Relevance)
発話（および他の）意図明示的の刺激は：
 - a. 少なくとも処理に見合うだけの関連性がある。
 - b. 話し手の能力と優先される伝達情報に合致する，最も関連性のあるものである。(Ibid.)

(17a)の「処理に見合うだけの関連性がある」とは、当該の発話が、それが発話されなかったとした場合に聞き手が注意を向けていたであろうと思われる情報よりも関連性がある、ということの意味する。そして、上記の2つの原理に従って発話の理解手順が導かれる。

(18) 関連性理論に基づく発話理解の手順

最小の労力で済む道筋をたどって認知効果を算出せよ。具体的には：

- a. アクセスしやすい順に解釈を進めよ。
- b. 関連性の見込みが満たされた〔破棄された〕時点で解釈を終了せよ。 (Wilson 2004-05)

この時、最適な関連性を目指す話し手は少なくとも次の2つのことを行っていると考えられる。

- (19) a. 処理労力に値する十分な認知効果を達成しようとする。
- b. aを行うために聞き手が無駄な労力を使わないようにする。 (Ibid.)

そして、(19)の帰結として(20)が導かれる。

- (20) a. 最初に得られた満足な(関連性の見込みが満たされた)解釈が唯一の満足な解釈である。
- b. 余分な処理労力は、追加される(さらに別の)認知効果によって相殺される。 (Ibid.)

VIII. 具体例の分析

1. 指示対象の特定

関連性理論に基づく具体的な発話の分析をWilson(2004-05)に沿っていくつか見ておく。まずは指示対象の特定についてである。ある男がホワイトハウスの外で以下の文が書かれたプラカードを持って歩いていたとする。

(21) George W. Bush is a crook.

ここで直ちにアクセス可能な解釈は「George W. Bushは米国大統領である」という解釈であり、これが男の伝えようとした唯一の解釈となる。これは、最適な関連性の見込み第2項により、話し手は意図した効果を達成するにあたって、聞き手に不当な労力をかけてはいけないことによる。もし、George W. Bushと聞いて通常聞き手が最初に思いつくのは「Bush大統領」の解釈である、ということを知っていた上で、男が「Bush大統領」以外の人物(例えば近所の「店主」)を指していたのであれば、男は聞き手に不当な労力をかけていたことになる。しかも、誤解を生むだけでなく、聞き手に不当な労力をかけて「誤った」(大統領の)解釈を導いた後によりやく意図した(「店主」という)解釈に至ることになる。さらに、男が「大統領」以外の解釈を導きたかったのならば、不当な労力を避けることができるように、発

話内容を別の形にすることができたはずである。したがって、最初の満足のいく解釈(=見込まれた通りの関連性のある最初の解釈)が唯一の満足のいく解釈であるということになる。

2. 適切な文脈の構築

次に、適切な文脈の構築とそこから得られる認知効果について見る。次の会話におけるMaryの発話をPeterがどのように解釈するかを考える。

(22) Peter: Do you want some coffee?

Mary: Coffee would keep me awake.

Peterの利用する想定と、そこから導かれる結論は(23)または(24)となる。

- (23) a. Mary doesn't want to stay awake. (文脈想定)
- b. Mary doesn't want anything that would keep her awake. (文脈想定)
- c. Mary doesn't want any coffee. (文脈含意)
- (24) a. Mary wants to stay awake. (文脈想定)
- b. Mary wants whatever would keep her awake. (文脈想定)
- c. Mary wants some coffee. (文脈含意)

上記2つの解釈のうち、Peterは発話時点でよりアクセスしやすい(最適な関連性を導く)文脈想定を選択することになる。

3. 間接的な返答

最後に、(22)を用いて間接的な返答の解釈の例について見てみる。(22)のMaryの発話からPeterが(23c)の文脈含意を導いたとした場合、果たしてこの解釈を導くために行われたMaryの発話はPeterにとって最適な関連性を持つかという疑問が生じる。もし、Maryが「コーヒーはいらぬ」と言うことだけを伝えたかったのなら、最適な関連性を持つとは言えない。なぜなら、より労力の少ない「No.」を発話すべきだからである。では、この返答が最適な関連性を持つとしたら、どのように説明すべきか。この場合、Maryは単にNo.と言うだけでは得られない、さらに別の認知効果を達成しようとしていたと考えられる。さらに別の認知効果とは、コーヒーを断る理由の提示である。この別の認知効果によって余分な処理労力は相殺されることになる。

以上、推論モデルの語用論理論である関連性理論の基本概念について、具体例を交えながら概観した。関連性理論によって展開される概念と説明手段は、従来意味論で扱われてきた現象も含めて広範囲に適用できる可能性を持っている。このうち次節では、英語の談話連結に関わる現象を中心に取り上げ、関連性理論に基づいていかなる分析が可能であるか検討したい。

IX. 談話の連続と推論

1. 連続する談話の形式と解釈

英語において2つの命題を結ぶために用いられる形式は以下の通りさまざまである。

- (25) a. I'm 65 *and* I'm very happy.
 b. It's not really a nice neighborhood. *Still*, she apparently likes living there.
 c. *Having* stolen the jewels, the thief had to think of a means of smuggling them out of the building. (Declerck 1991)
 d. *Persuaded* by our optimism, he gladly contributed time and money to the scheme. (Quirk et al. 1985)
 e. *Confident* of the justice of their cause, they agreed to put their case before an arbitration panel. (*Ibid.*)
 f. *To* climb the rock face, we had to take various precautions.
 g. Things then improved, *which* surprises me. (*Ibid.*)
 h. Tom can open Bill's safe. He knows the combination. (Blakemore 2000)

(25 a) は等位接続詞, (25 b) は接続副詞, (25 c, d) は分詞, (25 f) は不定詞, (25 g) は非制限的關係詞によって命題が連結されている例である。また, (25 e, h) は他の例と異なり接続機能を持つ語が存在しないが, 2つの命題が内容的に連続している(つまり連続した談話を示している)ことが分かる。関連性理論によらない解釈を取った場合, 1つの分析方法としては, 2つの命題には何らかの関係があるということを前提に命題間の意味内容を比較して, 首尾一貫性のある解釈を仮定するというものであろう。また, 接続詞や不定詞などの接続要素がある例の場合は, その慣習的な使用法(より具体的には辞書に記載された複数の語義)に照らし合わせて, 最も意味の通じる解釈を選択するという方法を取るかもしれない。第1の方法を取った場合, 何らかの関係があるという前提に立っても, 関係の意味があいまいである。また, 首尾一貫性のある解釈は複数生じる可能性もある。例えば(25 a)の場合, その真意は「65歳になったので幸せ」なのか, 「65歳になってしまったけれども幸せ」なのか, 首尾一貫性だけでは不明である。第2の方法を取った場合, 複数の解釈が生じる可能性があるだけでなく, 果たして慣習的な使用法の範囲内での解釈が妥当なのかという問題も生じる。また, 接続詞等が多義的であるという立場は, 同様の多義性が(25 h)のような連結語を伴わない文の連続の場合にも当てはまることを考えると, 疑問を抱かざるを得ない。いずれの方法でも

最終的には文脈を頼りに解釈が決定されることで問題が解決されるかもしれないが, 肝心の文脈の定義があいまいであり, 根本的な問題の解決には至らない。

一方, 関連性理論に基づいて分析をする場合, 与えられる解釈は関連性の原理と一致する最初の解釈となる。すなわち, 最適な関連性を目指す(正当化し得ない処理労力を使うことなく適切な文脈効果を生み出すと)理性的な話し手が意図したであろう最初の解釈である。(25)を具体的に分析するためにはBlakemore (1987)によって提出された手続き的コード化によって説明されるであろう。

Blakemoreによれば, 言語構造は基本的に2つのタイプの情報をコード化していると仮定される。1つは概念表示であり, もう1つは, 概念表示を操作する手続きである。概念表示は論理的特性を持ち, また, 真理条件的である(真理値を付与することができる)。例えば, 名詞や動詞などの内容語は論理形式の構成要素となる概念をコード化していると言うことができる。一方, 他の言語表現の中には概念をコード化しているのではなく, その表現とともに現れる文や句をどのように解釈すべきかについて指示を与える役割を果たす表現がある。つまり, 発話解釈における聞き手の推論にある種の制約を課す表現であり, これらの表現は推論の「手続き」をコード化していると言う。例えば, (26)の発話に対して(26 a, b)の2通りの解釈が生じる。

- (26) Tom can open Bill's safe. He knows the combination.
 (27) a. Tom can open Bill's safe; *so* he knows the combination.
 b. Tom can open Bill's safe; *after all* he knows the combination. (Blakemore 2000)

(27 a)の「TomはBillの金庫を開けることができる」は「彼は番号を知っている」ことの根拠を示し, (27 b)では逆に「彼は番号を知っている」ことが「TomはBillの金庫を開けることができる」ことの根拠を示している。ここで用いられている*so*, *after all*は発話における命題内容(真理条件)に影響を与えてはいないことから, 概念的にコード化されているのではない。*so*や*after all*などの談話連結語は聞き手が発話解釈において行う推論の仕方に一定の方向性をすなわち, 制約を与えていることになる。このような表現は, 意図された認知効果を生み出す方向に聞き手を導き, 不当な処理労力を使わないようにすることによって, 発話の関連性に貢献していると考えられる。

2. 分詞構文

上記に基づき, 分詞構文はどのようにして発話の関連性に貢献しているか考察する。(25 c)は現在分詞, (25 d)は過去分詞による分詞構文の例である。

- (25) c. *Having stolen the jewels, the thief had to think of a means of smuggling them out of the building.*
 d. *Persuaded by our optimism, he gladly contributed time and money to the scheme.*

分詞構文の一般的特徴は(1)分詞節の意味上の主語は主節の主語と一致する、(2)分詞節と主節との間に音調上の区切りがある、(3)分詞節の生起位置は文頭、文末、および主節の主語の直後である、(4)分詞節と主節は意味上、「理由、時、条件、様態」などによって関係づけられる、などであるが、このうちの(3)と(4)についてさらに検討する必要がある。(3)について言うと、(25c, d)その他の分詞構文の用例を見ると、文頭に生起する例が多く、生起位置については一定の傾向があるように思われる。以下は Declerck (1991) の (supplementive clause として挙げた) 用例の一部であるが、彼の挙げた用例の7割以上は文頭に生起するものである。

- (28) a. *Putting down my scissors, I stood up from my chair and answered the telephone.*
 b. *Not wishing to get involved with the police, I left the pub immediately after the fight started.*
 c. *Upset by the news of the revolution, they decided to fly home as soon as possible.*
 d. *Used economically, one tube of toothpaste should be sufficient for at least three weeks.*

次に(4)の意味上の関係について言えば、(25c, d)および(28)の文は「理由、時、条件、様態」のいずれかに当てはめることができるように見える。しかし、果たしてこれらの意味が唯一的にそれぞれの例に当てはめられるかという点については疑問が残る。例えば、(25c)は「宝石を盗んだこと」が「こっそり持ち出す方法を考える」ことに対して、単に時間的な前後関係を表しているのか、理由を表しているのかを確定することはできない。(25d)においても、「私たちの楽観的な見方に納得した」ことが「その計画に資金と時間を提供する」ことに先行する事実を単に表しているのか、行動を起こす根拠を表しているのかあいまいである。

発話解釈の観点から捉えなおした場合、分詞構文はどのような点で関連性を持つであろうか。特に、分詞節が先行する典型的な場合について考えてみたい。まず、分詞節が先行するという事は、分詞節が発話された時点で主語が明らかになっていないことを意味する。分詞節の意味上の主語は主節の主語と一致するから、聞き手は主節の情報を得ることによって主語についての情報が満たされる。ということは、聞き手は分詞節を聞いた時点で、その主語情報が直後の節の主語と一致することが保証されていることになる。聞き手にそのような道筋を与えることは、聞き手の主語の特定に際しての処理労力へ

の負担を軽減することになり、その意味で関連性のある情報を提供していると言える。

また、意味の上から(25c, d)および(28)に共通する特徴を挙げると、基本的に、先行節で述べられている事態は、後続節で述べられている事態に時間的に先行すると言える。(28a)などはその典型であろう。しかし、それだけならば単に *and* などの接続詞で連結するだけでも同様の効果を得られるかもしれない。*And* 接続などと異なるのは、先行節と後続節が因果関係で結ばれているという点である。ここで言う因果関係とは、直接的な因果関係というよりはある意味で間接的な因果関係である。直接的因果関係とは、例えば「撃たれて死ぬ」とか「滑って転ぶ」といった必然性を伴う関係を指す。これに対し、分詞構文の場合、分詞節で表される事態を新情報として受け取り、その情報とその他の文脈想定に基づいて何らかの帰結が後続する主節によって表現されるという意味で間接的な因果関係を持つと言える。例えば(28b)の場合、

- (28) b. *Not wishing to get involved with the police, I left the pub immediately after the fight started.*

発話時点において聞き手の想定には既に「話し手がパブにいた」、「パブでけんかが始まった」などが存在している (*the pub, the fight* の定名詞句の表現から明らか)。そこへ「警察と関わりたくない」という考えが浮かぶことによって、「関わりたくないからには何らかの行動を起こす」ということが推測され、具体的に選択された行動として「パブを出る」という帰結が生じるわけである。すなわち、分詞構文には、分詞節によって後続する主節に文脈含意を引き出す、という手続き的情報がコード化されていると言えよう。この手続き的情報によって聞き手の推論に制約が加えられた結果、望ましい解釈を効率よく導き出すというところに分詞構文の発話の関連性があると考えられる。

さらに、分詞構文全体の情報の重要性、あるいは、発話のポイントという点で言えば、発話のポイントは分詞節よりも主節にあると解釈される。これは以下の例のように、挿入節(ここでは非制限的関係詞節)で情報を提示した話し手が、この情報が発話の主要なポイントの一部ではないことを示している。

- (29) *Simon, who is a mathematician, cooked a chicken.*
 (Blakemore 1992)

つまり、話し手は挿入節という言語的仕組みを用いてこの情報が背景化される情報であるという含意を聞き手が受け取るよう期待して発話をしているのである。これによって、最適な関連性の見込みをもって発話を解釈しようとする聞き手は、挿入節以外の部分に発話の関連性を求めることになる。分詞構文もこの挿入節と同様に、

情報を背景化するための統語的仕組みとして用いられていると考えられる。

以上、主語の特定、文脈含意、情報の背景化という点から、分詞構文の発話の関連性について論じた。同じ視点から (25 e, f) についても分詞構文と同様の特徴が認められるものと思われる。

- (25) e. *Confident of the justice of their cause, they agreed to put their case before an arbitration panel. (Ibid.)*
 f. *To climb the rock face, we had to take various precautions.*

3. 非制限的關係詞節

最後に、(25 g) にあるような非制限的關係詞節の発話の関連性について考察する。まず、上記の議論に沿って言えることは、非制限的關係詞節も情報を背景化することによって発話の関連性に貢献しているという点である。しかし、非制限的關係詞節は (1) 主節には先行しない、(2) 主語を持つ、(3) 主節の主語と関係詞の主語は必ずしも一致しない、という点で分詞構文などと異なる。また、非制限的關係詞節は関係詞によって先行詞を特定することができる。しかし、代名詞と同じように関係詞も概念的でないことを考えると、関係詞もまた何らかの手続き的情報を持つと言える。また、関係詞を含めた非制限的關係詞節の内容と主節との情報上の関係を考えると、非制限的關係詞節は「主節（あるいは、主節の一部）について何かを述べる」という形をとっているのが分かる。言い換えれば、関係詞が話題として位置づけられているということになる。以上をまとめると非制限的關係詞節の手続き的情報は概略「直前の言語情報にアクセスして関係詞の指示対象を特定し、それについてコメントを与える内容を導入する」というものになるだろう。指示対象の特定を容易にすることによって処理労力に負担をかけないことと、非制限的關係詞節が情報として背景化していること、さらにその情報内容がコメントに限定

されていることを示すことによって解釈を容易にしていること、などが発話に関連性を与えているものと考えられる。

X. おわりに

関連性理論は、認知論的アプローチを取っていることと、その説明力の強さゆえに、その適用範囲は語用論にとどまらず意味論、さらには統語論の一部にまで及ぶ。また、これまで周辺的とされてきた言語現象についても興味深い分析が行われており、この理論に新展開をもたらす可能性も含んでいる。今回は特に談話連結に関わる事例について扱ってきたが、今後は to 不定詞や付帯状況に関わる表現について広く検討していきたい。

参 考 文 献

- Blakemore, D. *Semantic Constraints on Relevance*. Blackwell.
 Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances*. Blackwell.
 Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Kaitakusha.
 Grice, H. P. 1967. "Logic and Conversation," *William James Lecture*, Harvard University.
 東森 勲・吉村あきこ. 2003. 『関連性理論の新展開』研究社.
 加藤重弘. 2004. 『日本語語用論のしくみ』研究社.
 Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
 Sperber, D & Wilson, D. 1986/95. *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell.
 Wilson, D. 2004-05a. *Pragmatic Theory* (PLIN M202).
 Wilson, D. 2004-05b. *Issues in Pragmatics* (PLIN M301).